

音楽の友

2014年1月号

CONCERT REVIEWS

オーケストラ
東京ニューシティ管弦楽団
(第91回)

11月16日・東京芸術劇場●内藤彰(指揮)、清水高師(ソ)●シベリウス「交響詩《フィンランディア》」「ヴァイオリン協奏曲」「交響曲第2番」
名曲《フィンランディア》の「完成稿世界初演」と興味を引くプログラムで始められたが、演奏会に先立って指揮者の内藤彰から新校訂版についてのプレトークがあった。彼のモットーである原曲がもつ姿にできる限り近づこうというコンセプトのもと、《フィンランディア》の最終稿といわれるピアノ編曲版などをもとに、小節の削減、テンポやダイナミクスなどを校訂した版での演奏。目立った箇所はいくつかあるが、顕著に感じたのは、主部(変イ長調)の速めのテンポと際立つホルンといえた。敢えていえば、ピアノ編曲は、ピアノの楽器の特質を考慮してダイナミクスなどを変更する場合も考えられ、その点どのようであろうか。しかしながら、新鮮さと意欲的な響きが立ちのぼったことには違いなかった。続いて、清水高師の独奏による「協奏曲」は、彼の繊細かつ俊敏な技を披露。沈潜する抒情を温えた奥行きある表現を聴かせた。後半の「交響曲第2番」。総じて、節度と内観深まるアプローチが深く、オケは楽想一つひとつの輪郭を刻みながら緊張度を高めつつ一体感を築き、シベリウスの内なる魂の告白を聴衆に届けた。

●高山直也